

の職人を使い石工の技能士として全国名工の集りの一員として活動しております。石材業界も中国から安い製品が輸入されるようになり、厳しい状況ですが頑張っています。

終戦から帰国までの間に中国とくに閩錫山系の軍隊から残留をすすめられた向きもあったようですが、これに応じた兵隊は私の知る限りありませんでした。山西省にいた第一軍の関係ではあったようですね。蒋介石が終戦に際して、日本軍の将兵に対して早期帰国を優先してくれた温情は、忘れてはならないと思います。

「報怒以德」の告示により民衆の日本兵に対する態度はやさしく、私の接した中国人は「シーズン今度、中国に来る時は兵隊ではなく商人で来なさい。私が面倒見てやるから」と言ってくれました。

中国人の偉大さを痛感しました。

## 大東亜戦争従軍衛生兵の思い出

福岡県 日巻 久次

私は父・日巻猪之蔵、母・松枝の四男三女の兄弟の一員として、大正四（一九一五）年九月十五日、福岡県三池郡飯江村で生まれました。祖父母、父母、子供七人の十一人家族です。田一町五反、畑二反（甘藷、粟、大豆）で、山間の部落では規模の大きな農家でした。祖父が健在でしたが、父は胃の病気で一時期大牟田に居住しましたので、私は小学校は大牟田第一小学校に入学し、三年生の時に帰って故郷の飯江尋常高等小学校に転入、昭和四年、高等科を卒業して家業の農業に従事しました。

当時の農家では現在のように農機類はなく、農作業はすべて人力と牛馬の力だけでした。当時の農家ではどこでも当たり前のことでしたが、子供も小学校五、六年生にもなれば、馬の飼葉の草刈

りに行ききました。私もまだ担げもしない時から夕方早く帰って草刈りに行きましたが、少しでも怠けたら厳格な父から火の出るように怒られました。馬は一頭でしたが、若駒から育てて大きくなったら伯楽さんが来て、また若駒と取り替えて行きました。農家は養育費をもらっていました。

農家を継いで、これからは米麦だけでなく視野を広げた農業を目指すべきだと思い、同じ三池郡の県会議員の藤田農場に、年賃金百五十円の作男扱いで住み込みに入りました。農場は果樹と花卉の栽培、蜜柑の栽培が奨励された時期で、作業はほとんど山を開墾して蜜柑園を造成することでした。

道具は唐鋏、鋸、斧だけで、木株を掘り起こす作業は大変でした。私は幸いにも体は頑健でしたので困難に向かって己を鍛えるに良い機会だと頑張りました。藤田農場には当初は一年で家に帰りましたが、切に請われて中一年あけてさらに一年勤めました。

昭和十（一九三五）年、大牟田市で徴兵検査を受けましたが、身長が五尺三寸に足らず、残念ながら甲種合格ならずでした。昭和十二年に先生を退職された旧師の池辺三好先生が飯江村の助役兼兵事係でしたので、先生の勧めで福岡市百道の県の地方自治職員養成所で二月月の自治講習を受けて書記の資格を取得し、昭和十二年四月一日から飯江村役場に書記として就職しました。

#### 第一回目の臨時召集

昭和十四年十月十日、役場の当直の夜に大牟田警察署の動員係が臨時召集令を持って来ました。十月二十日、久留米歩兵第四十八連隊に衛生兵要員として入隊とのことでした。

早速、身辺の整理、親戚知己への挨拶回り等を行い、二十日朝、部落の鎮守の神前で武運長久の祈願と出陣式、長老、区長さんの激励に、決意を述べて、歓呼の声と旗の波の中、東肥鉄道の野町駅まで近所の人達に送られて、勇躍久留米の第四十八連隊に、衛生要員として入隊しました。衛生

兵要員六十人ほどで、各中隊の各班に数人ずつ分散配置されました。

私は砲兵大隊歩兵砲中隊の内務班に入りました。一期の検閲までは本科の歩兵と同じ装備で同じ教育を受けました。内務、軍人勅諭の暗唱、装具の手入れ、一品検査等何れも同じことです。二十五歳で一つ星の二等兵、教官は張り切り予備役の四十歳の山田少尉です。教育はほとんど営庭でしたが、連隊長の部屋から丸見えてますます気合が入ったのでしよう。少しでも気合が入ってないと国旗が立っている所を駆け足で回れ、気に入らないと何回も回れました。

高良台の演習場にも行きました。国分の射撃場で、壕の飛び越え等も全部やりました。飛び越え損ねて向こう岸に顔を打ちつけて前歯を折る者も何人も出ました。城島大木の神社への耐暑行軍は、夏の盛りの中を、完全軍装での行軍で本当に参りました。

検閲が済んで、衛生兵要員六十人は、各班から

集合させられ、道路越しの陸軍病院へ本来の衛生兵教育を受けに行きました。これを通修教育と言います。三カ月の通修教育が終わり、ようやく一人前の衛生兵になりました。ここで配置が決まり、六十人は隊付きと病院勤務とに分れました。

隊付き五人、残りは病院勤務で、私は隊付きに選ばれました。隊付きは部隊の演習にも付いて行きます。落伍兵が出るとこれを收容して帰るので、その装具も持たねばならないので特に強兵でなければなりません。

昭和十五年八月十五日、隊付五人中三人が門司出港、中支那に渡りました。名前は忘れましたが大きな船でした。上海から揚子江を遡航し九江まで、さらにここから漢口までは鉄道輸送でした。九江で上陸した時、紡績工場の大煙突に砲弾の穴が開いたままの姿が見えました、これが戦場だなあと感じたことが今も目に浮びます。

私達を受領に来た古兵さんたちは北支から中支に移動して来た輜重隊の方で、胸に三年以上の長

期奉公の鉄兜のマークを付けていました。本部は漢口で、八月の終わるか九月の初めに到着しました。第十一軍団園部部隊第二輸送監視隊で、松田兵団第二輸送監視隊といい、その後には第五十一兵站警備隊となり、武漢地区の警備が任務で、主に貨物廠の警備、監視でした。「中支派遣板橋部隊吉岡隊 日巻久次」が私の軍事郵便の宛名でした。

漢口では、第一と第二の捕虜收容所があり、私達三人は一緒に第二收容所の監視隊の隊付きで、そのこの医務室に入りました。吉岡中隊長、津流軍医中尉、後は下士官ばかりです。第二收容所では捕虜を使って種々な作業をさせていました。

監視隊員は皆鉄兜章を付けた三年以上の猛者ばかりですから大変でした。内地では注射は下士官以上がやりますが、ここではそんなことばかりはいつてはおられません。性病等になった者は夜中に内緒で注射をしてくれと、寝ているのに頼みに来るので注射をしてやりました。私は注射は上手で、軍医さんから中隊長にも注射をするように指

示されました。

武昌の貨物廠の警備に吉岡中隊が行きましたが、その時、隊付き衛生兵として一人で行った時にコレラ患者が入院して来ました。習った通りの症状が出ており生きた心地はしませんでした。寒気がしてどんだん吐いたり下したりしていましたが、病院に連れて行く間に冷たくなって終いました。後で生きていると聞いて安堵しました。名前も覚えていません。直ぐ全員検査、保菌者も出て外出禁止です。外部との交流が出来ず本当に大変でした。

昭和十六年八月から部隊の推薦で三カ月衛生下士官要員として武昌の武漢大学（病院）で下士官教育を受けました。下士候補生で兵長、教育を終わって板橋部隊に復帰、十六年十一月付で衛生伍長に任官しました。

漢口本部と武昌等十余の支廠との連絡はすべて現地の徴発漁船を使用しました。定期便もありました。風が出て揚子江が荒れる時は山のような波が上の方にくると、船は谷間にあり、次には船が

山の上にあります但不思議と漁船は沈みませんでした。  
した。

武昌にいた時、懐かしい人に会いました。漢口の先の王城に衛生材料等をもらいに行つた時と思ひますが、王城の陸軍病院長が中尾軍医少佐殿と知りお訪ねしましたら、よく覚えておられて、『お前どうしてこんなところに』と驚いて喜ばれました。応召のとき久留米の第四十八連隊で身体検査官の先任軍医でおられ『お前はマルニヨカタルだと検査の軍医が言うので帰つても良いぞ』と言われました。私は『ここまで来ておめおめと帰れません。行く所まで行きます。私の体は頑健です』と頑張つたことがあります。大尉の合格の印を押してもらつた時に病院長もおられたことや、その後のことを報告したり、お互いの武運を祈るなど楽しい時間を過しました。

昭和十六年十二月八日の日米開戦の時には漢口の本部にいました。また十二月の留守宅が火災で焼失したことも後日隊長から聞きました。

昭和十七年三月、満期除隊で帰る甲府の第六十三部隊の某伍長と、留守宅火災のこともあつてか隊長命令でその伍長と交代して、新藤中尉引率で甲府第六十三部隊に帰着、召集解除となり帰宅しました。幸い応召中、役場から留守宅に、書記給料約五十円が支給されていたので助かっていました。これも旧師のお陰感謝しています。

復員して来たら、飯江村は隣の高田町と合併して飯江村役場は高田町の飯江事務所として業務を続けておりましたので直に復職しました。

結婚は昭和十八年九月、部落の世話役の肝入りで近所の同じ日巻家の養子に入りました。ちなみに田浦部落は二十一戸の内、十九戸が日巻姓の同族部落です。夫人のスミエさんは桜井家から来た叔母マツさんが子供がないので、里の桜井家から七歳の時に入籍しています。どちらも直ぐそばの隣同士で、今から思えば切れない縁があつたのでしょう。養父母、戦死した兄の嫁と四人の子供の九人家族（養父母は兄嫁の実家の父母が手伝）で

した。田八反、畑一町の養蚕農家で桑畑でしたが芋畑に変更中で役場勤務のかたわら農作業を手伝いました。

戦局は次第に急を告げ、物資不足、食糧難で、供出が喧しくなり、桑畑にまで芋の供出割り当てが来て、農家でありながら食うのに困りました。甥（戦死した兄の長男）が中学三年生の時、貸していた兄嫁の実家が空きましたので、両親と兄嫁と子供達は実家に帰りました。私は親代わりで全員の面倒を見て来たので甥達も七十歳になった今も、当時のようにお父さんと言ってくれます。

ようやく落ち着いた生活に戻った所で、昭和十九年四月、宿直中に二度目の召集令状が来ました。今回は航空総監部、大刀洗陸軍飛行学校要員として、經理将校五人、衛生下士官（衛生軍曹五人、衛生伍長五人）十人が久留米の第四十八部隊に入隊して、私達は直ぐ大刀洗の陸軍飛行学校に行きました。大刀洗飛行学校には本校のほか十三方所の分教所が在りました。朝鮮にも在りました。最

初は佐賀の目田原分教所でしたが、軍医が一人、下士官は私一人でした。今は自衛隊の補給廠になっています。

祖父が卵を持って面会にきました。祖父は背が高かったのですが、卵が割れると大変なので満員列車の中でズット頭の上に差し上げてきたのですが、開いてみたら茹で卵だったと笑えない話があります。家内も何回か面会にきました。切符を買うのが大変だし、満員列車だったが若かったので苦にはならなかったそうです。

次いで熊本県玉名、当時は高瀬、立願寺、黒石原分校に行きました。ここには元挺進隊があつて航空隊関係の教育、作業をしていた所を黒石原部分教所として軍が使用していました。

警戒警報発令中に、防空壕の中から見ると高瀬の上空で、グラマン艦載機と日本空軍の戦闘機が空中戦を展開中でした。夢中で見ていますと突然グラマン二機がこちらを向いて突込んで来て、バリバリと機銃掃射をして来ました。幸い壕

の両側に弾痕が飛び防空監視隊の数人が軽傷を負った程度で済みました。

本当は飛行隊と監視哨が目標だったかも知れませんが、空中戦の結果は分かりませんでした。グラマンが落とした空になったガソリンの予備タンクが一個残りしました。黒石原では約一年勤務して、大刀洗の本校に帰りました。

#### 大刀洗空襲

昭和二十年二月二十三日昼ごろのことでした。宮様が『少年飛行学校』を視察にお出でになるということで、飛行兵は皆兵舎に入っていて営庭に誰もいかなかったのが幸いでしたが、B 29が九機編隊でちょうど十波、計九十機が南の空から真白の機体から次々に爆弾を投下して行きました。

上空一万メートルぐらいの高度で来たので、爆弾は四五度ぐらいの上空で落とされるのが一番危険で、頭の真上から落とされても安全です。B 29が爆弾を投下する時は良く見えましたが見えなくなりますが、地上近くにくるとザアーと夕立

のような音がして、その後がボンボンと大爆発です。

大刀洗には飛行学校、航空廠、陸海軍の特攻基地その他諸々の空軍関係が百部隊ぐらいありましたが、それがもう散々にやられてしまいました。ここには航空隊がたくさんあり、甘木には滑空機の訓練機に乗る前に練習訓練所がありました。

また飛行学校の生徒達の宿舎もありましたので私達も医務室の一部もそこに移しましたが、その日は他所の戦闘隊の人達が大勢来ていました。空中勤務の操縦士です（特攻機の乗員？）。B 29が次から次に来るので宿舎では危ないと、直ぐ横の桑畑に避難されました。ところがそこに爆弾が落ち、その爆風で幾人かやられました。私は炊事場から夢中で下水の大きな土管の中に避難しました。爆弾が落ちた時は飛ばされそうでしたが、幸い飛ばされずに済みました。

山本軍医が桑畑の人達の救護に行けと言われたのですが、まだB 29が飛んで来ているので、「今

行ったらやられるぞ。待て」と止めました。後で軍医さんから『あの時君が止めてくれたから良かった』とねぎらいの言葉がありました。我々の宿舎は瓦が落ちたぐらいの軽微な被害でした。桑畑の人達を收容して、後はその隊の救護の方々に任せ、我々は急遽大刀洗に急行しました。

大刀洗の本校に着いて見ると、もう大変でした。可哀相だったのは、航空廠で落下傘作業をしていた女子挺身隊の女学生さん達が、廠の集団防空壕に避難していた所に爆弾が落下して爆風でやられてしまいました。広い講堂には傷はなく奇麗な死顔の女学生が五十人ぐらいとのことでしたが、親御さん達の気持ちを思うとたまらない気持ちでした。

部隊周辺の一般人の被害も相当なものでした。二百五十キロ爆弾の穴だらけで、学童の被害もあったと後で聞きました。私達は少し前に甘木の生徒隊の所に移ったばかりで命拾いをしました。部隊の方は格納庫も引つ繰り返り、医務室の二階は

残っていました。一階の我々がいた所は吹っ飛んでいました。横の大桶が折れていたのがまざまざと目に残っています。

後の收容は私達がしました。死んでいる方は良く拭いて粗相のないようにしました。本当に言葉もありません、ただ御冥福をお祈り、生き残った我が身の幸せを噛み締めるだけで、戦争の悲惨さを初めて身にしみて感じました。

私達は衛生兵ですから戦だけでなく民間人の救護に回りましたが、部落のあなた、このたに二百五十キロ爆弾の落ちた後に大きな溜め池が出来ていました。

#### 鳥取に派遣の記録

大刀洗の上空襲の後、昭和二十年六月から鳥取県湖山村に特殊訓練のため、一個小隊編成で、隊長のほかに軍医一、下士官一、衛生兵三人が一緒に派遣されました。教官と操縦の出来る助手の下士官が数人、後は少年飛行兵ばかりの編成でした。このころになると太平洋側の飛行訓練が敵艦載



機等の襲撃のため使用不能の所が多くなって、山陰の砂丘の谷間の滑走路一本を使って訓練をすることにになりました。これは日本海からの敵の上陸に対する防衛の目的だったとのことでした。

訓練は練習機に炸薬を積んでの特攻訓練でした。赤とんぼ級の練習機で、訓練中に海中に突き込んで教官の一人は機上で亡くなっていました。可哀相でした。

仮兵舎は砂丘の山に建てられていましたが、夜に蚤が多くて睡眠が出来なくて困ったものでしたが、後に吉岡村のホテルに宿舎が出来るようになり助かりました。

ここは温泉保養地で、また土地の有志の方、おばあちゃん、お年寄りの方達が、特攻兵さんを拝まして下さいと、面会にきてくれました。ここは魚が取れる所で刺身などをもって慰問にきてくれました。戦地に送った我が孫の姿を重ねておられたかと思いやられました。女優の田中絹代さんと高名な歌手の人達が慰問に来てくれた時、牡丹餅

を作って上げたら、私達が慰問されましたと喜んで帰って行かれました。

一度岐阜の航空総監部へ衛生材料受領と業務連絡のため出張を命ぜられ、衛生兵三人と汽車で岐阜に行く途中、岐阜の町が焼夷弾攻撃を受けて炎上、列車が動けなくなり、長良川鉄橋を歩いて渡りました。岐阜の町は焼野原でしたが、総監部は無事だったので任務を終わって翌々日鳥取に帰りました。

#### 終戦の日

昭和二十年八月十五日、当地の補充兵は五十歳ぐらいの人が多く召集されて来た人達の身体検査を公民館で行っていました。昼には天皇陛下の終戦のラジオ放送があつて、身体検査も中止して解散となりました。

皆を集めて「お前たちは折角張り切つて来たがこれで戦争は終わったので帰つてもよいぞ」といわれましたが、皆家を出るときは悲壮な別れをして来ており、中には水杯をして来た五十歳に近い

人もおり、これでは家に帰れないという人もいました。皆が無念そうな様子でそれぞれの家に帰って行きました。

私はここで召集下士官では召集期間が長い方だったので即日召集解除となりました。しかし軍命令で「そのまま待機せよ」との命令が出ましたが、翌十六日に解除となって家に帰りました。

昭和十九年ころには、郷里の田舎や小谷にも、本土防衛のために軍物資の分散と軍隊の再配備が行われ、清水山には、小倉の補給廠が疎開してきていました。これらの兵たちも翌十六日には取り消され、召集解除となってそれぞれ家に帰って行きました。下関にソ連兵がいるとかの流言が飛びましたが、ソ連兵はいなくて、朝鮮人達が戦勝国人と言って列車に乗り込んで来て、腕時計とか指輪とかを強奪して行きました。つくづく敗戦の悲哀を感じました。

私は十七日に家に帰りましたが、終戦三日目ですが、まだ家には久留米の兵隊さんが十人ほど宿

泊していました。兵隊さん達は、炊事、洗濯等一切の生活は自分達で始末して少しも手が掛らなかつたし、中には農作業のお手伝いまでしてもらった家もありました。それも数日後には皆引き揚げて帰りました。

復員して役場の書記に復職、戸籍係主任として勤めながら田八反畑一町歩を耕作しました。田は米、畑は甘藷の割り当てがきびしく、桑畑まで面積に応じて甘藷の割り当てがあり農家でありながら食料に困るような状態で他家から買って供出したこともあるとの話でした。

年寄りの父と妻のスマエとでは馬も使えないという時、役場で元部下だった坂井さんが復員して来て「日巻さん私は帰って来ましたが、仕事がない、どこかないでしょうか」と相談をうけました。

「そう言うことならどうせ百姓の手が足りないの  
で、私が役場を止めましょう。後を頼みます」と言うことで、昭和二十二年に役場を退職しました。坂井さんは助役まで勤められた方で、「常に私の

今日あるのは日巻さんのお陰です」と、言つてもらっています。これも有り難いことです。

退職後は民生委員を四期十二年勤めました。ほかに請われるままに校区消防分団やら蜜柑、すもも、ネーブル等の果樹栽培の組合の役職を勤め、先達的な役割を果たしてきました。

蜜柑一本で米一俵分の値段で、蜜柑、果樹はウハウハの時代、金にならず捨てた時もありました。現在は長男夫婦が後継者としてイチゴを栽培し、イチゴの認定農業者として頑張っています。

今は夫婦健康で悠々自適、行政の福祉、高齢者への行き届いた思いやりに甘え、平穏な日々を感じながら過しています。波乱の九十余年を思うとき平和の尊さ有り難さがしみじみと感じられます。

## 戦傷にもひるまず

宮城県 高橋清喜

歓呼の声と熱気に包まれ、地元の飯野川尋常高等小学校の校庭において、出征する十一人の壮行会を開催して頂き、町長さんをはじめ町の有力者の方々の激励と祝辞に応えて、「皇国のために身命を捧げて来ます」と無我夢中で覚悟のほどを披瀝し、後顧の憂いもなく、住み慣れた故郷に別れを告げた、あの日あの時の感激が今でも脳裡に焼き付いています。

私の家は父母と男兄弟四人、私はその末っ子として大正十一（一九二二）年一月十二日、生を享け、皆から可愛がられ、世間の痛みも苦しみも知らず、家族の愛情の中で育ちました。長兄は満州と南方に、次兄は北支において戦死、三兄はビルマにと、北から南の戦場にて活躍した軍人一家を誇りにしております。六十余年の歳月が過ぎ、記